大学サッカープレイヤーの性格研究

A study of the personality in college soccer players

1K04B112-0

首藤 豪

指導教員

主査 内田直先生

副査 大榎克己先生

目的

サッカーでは、11人の選手が各ポジションでそれぞれの役割を持っていて、大まかに攻撃と守備に分けられる。選手のポジションを決める際には、各ポジションに必要な身体的特性以外にも、それらのポジションに望まれる性格特性も1つの重要な因子とされている。

これまでの研究では、4つのポジション(GK・DF・MF・FW)と競技レベルの違いによって性格特性があることがわかっているが、具体的な細かい性格因子までは調査されていない。

そこで今回は、大学サッカープレイヤーの性格特性と、さらに細かい性格因子の傾向を調査することにした。

方法

対象は、関東大学サッカー1部リーグのW大学チームの部員91名である。それぞれの学年の人数は、1年生23名、2年生25名、3年生22名、4年生21名である。ポジションは、攻撃(FW・MF)39名、守備(MF・DF・GK)52名であり、レベルは、A・30名、B・61名である。本研究では、MF39名は攻撃的な選手と守備的な選手とに分け、レベルは、昨年から今年にかけての公式戦(リーグ戦、総理大臣杯、大学選手権)に出場経験のある選手(A)とない選手(B)とに分けた。

矢田部・ギルフォード性格検査(YG性格検査)により、大学サッカープレイヤーの性格特性を、ポジション(攻撃と守備)と、競技レベル(A, B)の面から比較した。

検査項目は、①性格類型(A:平均型、B:不安定積極型、C:安定消極型、D:安定積極型、E:不安定消極型)および、②性格因子(D:抑うつ性、C:気分の変化、I:劣等感、N:神経質、O:主観的、Co:非協調的、Ag:攻撃的、G:活動的、R:のんきさ、T:思考的外向、A:支配性、S:社会的外向)である。

ポジションおよびレベル間の比較では、それぞれ分散分析を用いて統計学的検定を行い、いずれも有意水準5%をもって有意差ありとした。

結果

①性格類型

チーム全体では、安定積極のD型が41.8%と最も多かった。攻撃には、不安定積極であるB型が守備

よりも多く、守備には、安定積極であるD型が攻撃よりも多かった。レベルAは、レベルBに比べてD型の割合が高かった。

②性格因子

攻撃-守備の比較では、C:気分の変化、R:のんきさ、で有意差がみられた。

レベルA-レベルBの比較では、I:劣等感、O:主観的、T:思考的外向、で有意差がみられた。

考察

競技スポーツに関わることで、活動性や社交性、活発性といった積極的な性格特性が身につくといわれている。チーム全体で積極的なB・D型が多く、消極的なC・E型が少なかったことから、対象のサッカープレイヤーにもこのような傾向があらわれたと考えられる。

①攻撃-守備

D型は、競技レベルの高い選手に多いとされている。対象チームは、大学サッカー界において全国でも強豪のチームであり、スポーツ推薦などで全国トップレベルの選手が多く所属していることから、D型の割合が高かったと考えられる。

攻撃において、積極・不安定であるB型が多かったこと、性格因子で気分の変化が大きいという有意差がみられた。このことから、攻撃の選手は、相手ゴールに向かい攻撃を仕掛ける前向きで積極的な性格である一方で、得点を決めるといった結果を求められるプレッシャーや、思い通りにいかず相手にボールを奪われることから生まれる情緒不安定な性格でもある傾向があると考えられる。

一方で守備は、常に安定した確実性のあるプレーを求められ、最終ラインで守備をするプレッシャーに慣れていることから、安定で積極的な性格特性があると考えられる。

②レベルA-レベルB

性格因子でレベルAの劣等感が小さい傾向がみられた。公式戦に出場した経験や、全国レベルの実績を残した自信から、決断的で自信のある性格傾向があると考えられる。

性格因子でレベルAの思考的外向が高い傾向がみられた。競技経験や自信のあらわれから、物事を深刻に考えず、よい方向に、気楽に考えられるといえる。